

『竹取物語』の帝像

菅 原 秀

一 はじめに

『竹取物語』において、帝は六人目の求婚者としてだいぶ後になって登場してくる。帝の登場の前に貴公子である五人の求婚者が登場し、いずれもかぐや姫の難題を前に失敗に終わる。帝もかぐや姫と結婚できなかったのであるから、六人目の失敗者なのであるが、前の五人の貴公子と同列に置くことはできない。帝は明らかに前の五人の貴公子とは異なるのであるが、それは最高権力者であるとする身分立場の違いではない。帝は明らかに前の五人の貴公子とは異なり、かぐや姫との関わりにも圧倒的な分量を持つて書かれており、それなりにかぐや姫に対応されてもいる。昇天直前にかぐや姫は帝に手紙と不死の薬まで残している。帝にはそれなりの心遣いを見せるに至ったのはなぜなのか。五人の貴公子たちとは何が違うのだろうか。

五人の貴公子は、「あたりを離れぬ公達、夜を明かし、日を暮す、多かり。」という中、あきらめず「その中に、なほ言ひけるは、色好みといはるるかぎり五人、思ひやむ時なく、夜昼来たりけり。」という。そして翁に「かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ。」とも評されている。

帝は、世間に「色好み」と評された五人の貴公子よりも、かぐや姫の心を動かしている。地上の最高権力者ということも考えられようが、

それだけではないとしたら、五人の貴公子を超える要素はどこにあったのだろうか。
そうした帝像を、帝の求婚譚と五人の貴公子の登場する難題譚とを関連させながら、そして五人の貴公子が評された「色好み」ということも含め検討してみたい。

二 難題譚に見る対照的な五人の貴公子像

五人の貴公子が登場する所謂難題譚のところは、かぐや姫にこの世に存在しない宝の持参を条件にされ、全員失敗に終わる失敗談としては共通している。しかし、極めて巧妙に対照関係が駆使され、主題の具体化に向かって書き進められている。^{〔注1〕}

まず石作の皇子と庫持の皇子の話の場合は、スケールの差はあれども偽物を準備し、かぐや姫を欺こうとする点では同じであるが、行動のうちでも特に失敗してから見せる行動を見れば両者の人間性は全く対照的である。

かぐや姫に偽物と見破られた後の行動からその人間性に注目すると、石作の皇子は、姫に見破られてもなお「鉢を捨てても頼まるかな」（恥をすてても）^{〔注2〕}と言いつけるほどである。さらには「言いかかづらひて」帰つていくのである。本文で作者が「面なきこと」と言うように、自信もないのに、無神経で恥知らずとでもいうべき行動をとっている。

一方の庫持の皇子は工匠らに事実を暴露されて、珠の枝が偽物と見破られ失敗に終わってからは、石作の皇子とは反対に「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天下の人の、見思はむことの恥づかしきこと」と山中に深く入り、二度と姿を見せぬようになってしまふ。このように、偽物を準備し、かぐや姫を欺こうとする点では同じであるが、失敗してから見せる行動を見れば両者の人間性は全く対照的である。

また四番目に登場する大伴御行の大納言と五番目に登場する中納言石上麻呂足の場合は、大納言は、竜の頸にある五色の珠を獲って持ってきた者には、願いを何でも叶えてやろうと無謀な計画を家来達に命じ、「君の使といはむ者は、命を捨てても、おのが君の仰せ言をばかなへむとこそ思ふべけれ。」とまで言い放つ。やがて業を煮やし自ら出向くが海難に遭い目を李のように腫らし失敗に終わる。そしてかぐや姫に対する悪態をつくのであるが、向こう見ずで剛健であるがどこか憎めない単純さである。こうであるゆえか、ずるがしこい家来達にいいようにあしらわれ、だまされてもいる。

対して、中納言石上麻呂足の場合は、家来達に命令はするのだが、家来達はあれこれどうすればよいのか進言し、家来達が自ら獲得に向け動き出す。それが失敗すると、さらに家来でもないのに倉津麻呂という翁がこれも自ら助言をする。知己を得て挑むがうまくいかず、やがて中納言自ら荒籠に乗り込むのであるが、結局落下し掴んでいたものも古蓑で失敗に終わる。中納言はすべてを自ら命令するのではなく家来たちが自らする進言を聞き入れ、果ては家来たちが主君のために自ら動き出すので頼りにしきるほどである。まさに大伴御行の大納言と中納言石上麻呂足は対照的である。

さらに言えば、石作の皇子と庫持の皇子は一応は翁の屋敷のかぐや姫のもとに姿を見せ、姫に偽物と見破られる。そして人格としては策

略家であるがしこいともいふべきものである。一方の大伴御行の大納言と中納言石上麻呂足は、翁の屋敷のかぐや姫のもとに全く姿すら見せない。そして人格としてはずるがしこさはなく、むしろ人間的には多少の魅力を備えているともいふべきものである。それぞれを組にして比較すると、石作の皇子と庫持の皇子との組と、大伴御行の大納言と中納言石上麻呂足との組とで、対照的な関係にある^{注2)}。

残る第三番目の登場人物の右大臣阿部御主人の話は、金持ちで一族も繁栄し幸福であるがゆえに世間知らずで万事鷹揚とし、火鼠の皮衣をとる計画をするわけでもなく、唐土の悪徳商人任せで金で解決できるだろうとのんびり構えている。悪人である点は見い出せないが、行為そのものは金頼みであり、大金をつぎ込む決断はしているものの自ら努力はしない。皮衣とわざわざ歌を作って持参したものの、持参品を目の前で焼かれ、さらには皮肉だらけの歌を詠まれ、あげくに皮衣を入れていた意匠を凝らした箱に入れて突き返され、最も屈辱的な仕打ちを受ける。偽物であるとかぐや姫にばれて、といってもこの場合は本人もそのときに知り、ただただ呆然とするだけである。

この右大臣は、人をだまそうというのではなく、ただ鷹揚としている。しかし、自ら行動はせず金をつぎ込むのである。そうすると、この話は偽物を姫に提出したという点では前の皇子二人の話と同様といえ、人格にあざとさがないということなら後の大納言と中納言の二人の話と同様ともいえる。

振り返れば、前の皇子二人は、品物の準備はするものの偽物でだまそうとし、人間性は程度の差はあれずるがしこいともいえる。ただ、翁の屋敷を直接訪問はしている。

そしてこの右大臣は万事鷹揚として、ずるがしこくはなく人間性は悪いとはいえない。しかし偽物を提出したことに変わりはない。右大臣も翁の屋敷を直接訪問はしている。

続く大納言と中納言は、品物の準備はできなかったが、人としては悪いとはいえず、むしろ一面では魅力的ですらある。ただし、翁の屋敷を訪問はできていない。

こうしてみると、前の皇子二人の対照関係において描ききれなかったことが、後の大納言中納言の対照関係のところには見られるのである。つまり第三の右大臣阿部御主人の話は、問題の入れ替えの役目、後半につながる役目を果たしているのである。

こうして対照の関係によって異なるものを導きだし、それを転換させながら連結し、それを使ってまたさらに対照の関係を使って異なる物を導き出している。

そしてこうした対照の関係を駆使して何をしているのか、言い換えれば何のためにこの対照の関係を駆使したのかといえ、主題の姿を明確にしているためである。

三 難題譚の構造がもたらす主題

「難題譚」の前どころのかぐや姫と翁の会話のやりとりで、結婚を願う翁に対し、かぐや姫は「世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らでは、婚ひがたしとなむ思ふ」と不安を見せ、翁は五人の方々はそれぞれに「心ざしあらむ人」であると言う。

そこでかぐや姫は「何ばかりの深さを見むと言はむ。いささかの事なり。人の心ざし等しかんなり。いかでか、中に劣り優りは知らむ。五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらむに、御心ざし優れたりとて、仕うまつらむ」との考えを述べている。重要である「心ざし」は五人の貴公子とも優れていて甲乙つけがたいので、見たいと思っている物を見せてくれる人を「心ざし」が優れている人と判断しようという、いわば宝の持参が「心ざし」の証という内容である。それで無理難題

の提示とつながっていくのであるが、あり得ぬ物を条件として、提示された者たちの反応を見ても、一見すると姫の断りの口上、非情さの現れと受け取れる箇所でもあるし、指定された宝の持参のみが条件のようである。

しかし、ここで出てきているのは「心ざし」と「ゆかしき物」の二つのものである。考えてみれば、姫と翁のやりとりで相手に対して重要視していたのは、「深き心ざし」なのである。「ゆかしき物」については結婚は拒否したいが翁に背くわけにもいかないという状況でいわば強引にひねり出されたものに過ぎない。見たいと思っている物がこの世に存在せぬ宝であるということならば、仮に相手を選ぶとすれば、残るのは当然「深き心ざし」なのである。

五つの話が対照という関係を駆使しながら書き進められていったのは、この「心ざし」というものの具体的なありようである。

先に検討した構造に従うと、共通性の奥に様々な対照の関係を使いながら、前の皇子二人とで、人を欺こうとするずるがしこい人間性をあぶり出し、右大臣で万事鷹揚としてずるがしこくはなく悪いとはいえない人間性によって次につなぎ、続く大納言と中納言で、一面では魅力的ですらある人間性に到達させている。

四 五人貴公子像とその到達点

条件に出した宝物を持つてくることができなかったこと以外で、かぐや姫が拒否してきたのは、どんなことだったのか、言い換えれば何がいけなかったのかその原因という見方をすると、まず、条件に出した宝はそれぞれ本来は存在しないものであることははじめから十分承知していたはずである。そうであれば、単に偽物であることや手に入れられなかったことだけの話ではないはずである。

一人目の石作の皇子では、かくや姫は持参品を偽物と見抜いているが、偽物だったことが問題というよりも、ずるがしこく欺こうとしたり、偽物とばれても恥知らずなまでにしつこい人間性が問題とされている。

二人目の庫持の皇子も、ずるがしこく欺こうとしたり、いくら精巧に品物を作らせて持参して、さらにとうとうと作り話を述べても、結局偽物とばれてしまう。それなりの私財を投じているが、欺こうと偽物の作成に向かったためそれは姫に誠意としては映らない。前の皇子と対照的なのは失敗後非情に恥じ入っていることである。では欺こうとしなければいいのだろうか。

三人目の右大臣は、同じく偽物と見破られるが、欺こうなどとはしていない。では自ら努力して苦勞して準備していかないのがよくないのだろうか。ここでも私財の投入は自らの努力とは見なされていない。また、ずるがしこがないだけでは人間性の魅力とはならないということであろうか。

四人目の大納言は危険も顧みず体を張って非常に努力をしたし、人間性も悪いとは言えない。しかし人に慕われていない。家来達のずるがしこさを管理できず、結果的にずるがしこさを内包してしまっているとも言える。また探索失敗によって翁の屋敷の訪問は断念してしまい、その際かくや姫に悪意を向ける。人間性に問題がなくさらに慕われる人物ならよいのだろうか。

五人目の中納言は、大納言とは対照的に、家来達の協力する姿から見て人に慕われてもいる。そして前の皇子二人とも対照的にあざとさもない。前の四人になかったものが備わっているのであるが、一つ果たせなかったのは、翁の屋敷の姫のものととの訪問である。

こうしてみるとかくや姫が「少しあはれ」と思ったのは、中納言が宝探索がもとで、つまり自分が出した条件のせいで死に至ったという

こともあろうが、真の条件の方では惜しいところまできていたのに残念だという意味合いもあると考えられなくもない。

かくや姫はこの世にはない宝の持参という、いわば一見すると越えられない柵をたてたのであるが、この世にないことは承知のことであるので、求婚者選定の形をとったこのやりとりは、柵の内側に入り込んできた者で、かつその者の人間性に成否の鍵があるということになる。彼女と結婚とまではいかずとも心を動かすことになるのである。

こうした見方をすると一人目の石作の皇子の行動は、宝はじめからないのであるから、むしろその宝の真偽よりも実際に屋敷に行ってから、和歌などを通じて気持ちを伝えて何とかする方に力を入れていたとも言えなくもない。かくや姫と翁の例の「心ざし」を巡っての会話のやりとりのあと、条件の提示を経てすぐに一人目の求婚者として石作の皇子が登場し、このような行動をとったところから見ても、作者はもともと宝は存在しないのであるから、姫の心を動かすには人間性しかなく、それを姫の前で示せる人物をと構想していたのではないだろうか。考えてみれば難題譚の後に登場する帝は方法はともかく翁の屋敷へ出向く姫の姿を見、さらには「影」という姫の人ではない姿を目の当たりにすることができている。こうしたことがあってはじめて昇天までの話が成立する。「心ざし」のありようはもちろん、本人に会うということも作者は重く見ていたのではないだろうか。

こうして、対照的な関係によって導き出された五人の中では最良の人格を持つ中納言石上麻呂足が、五人の中ではかくや姫の心を「少しあはれ」とまで動かすという意味で惜しいところまで行く。

五人の貴公子がかくや姫に示すことができた、言い換えれば到達できたレベルは、こうした人を欺こうとしたりなどはせず、一途であり、人に慕われるような人格の者であってこそ、初めて愛を語り、求婚できるということである。

ただ、「心ざし」というのは、「深く愛すること（心）」ではないかとも思えるが、ここではその深さや程度ではなく、愛を語る資格があるかどうか人間かという、いわば愛を示す上での資質ということになってしまっている。これは、条件の宝の持参がそのまま愛情という無理難題によって、愛情云々の前段階で排斥される設定によるものであろう。五人の貴公子は、どのような愛なのかをかくや姫の前で示す前に終わってしまったている。

世間で「心ざし」もあり、「色好み」と評判の五人の貴公子が到達できたのは、こうしたレベルにとどまるのである。

五 五人の貴公子を超える帝像

「御狩のみゆき」と呼ばれる帝の求婚譚のところの話は、帝はかくや姫の評判を聞きつけ、使いをよこして求婚するが、かたくなに拒否される。使いである内侍中臣房子は、帝の御意向であるとかかなり高飛車な態度で臨むが、五人の貴公子の失敗を思い起こせば、かくや姫の心を動かす従わせるところか、対面すらかなうはずもない人格と振る舞いなのである。帝がかぐや姫を「多くの自殺してける心ぞかし」との言いようから、戻った後の内侍の報告ぶりが推し量られるが、失敗後の大伴の大納言を彷彿とさせる。かくや姫としては、条件は何かと問われもせず、高圧的な命令をされるのであるから、五人の貴公子の時とは異なり、断る目的の難題条件を提示もできず、死ぬとか消え失せるといった反応をするのは当然とも言える。中納言石上麻呂足に「少しあはれ」と思うに至ったかくや姫に対し、帝の指示、内侍のやり方は何も分かっておらずむしろ逆効果でさえある。ここまでであるならば、帝も求婚失敗者としては、前の五人の貴公子と同様である。

こうして帝はかえって負けてなるものかと態度を硬化させ、翁を説

得し、狩の際に立ち寄るといふ体裁で翁の邸のかぐや姫のもとにやってくることになる。そして帝は、前の五人の貴公子にはなしえなかったことに成功し、前者が到達し得なかった段階まで到達している。それが形はどうあれかくや姫との対面である。当時の男女において、姿を見られてしまうことがいかに重要であったかは言うまでもないが、先の難題譚では、この世に存在し得ぬ宝の持参という難題によって、五人の貴公子はかくや姫と対面はできておらず、本人の姿を見るに至ってはいない。

帝は、強引で策略的な方法にしても、かくや姫との対面は果たし、五人の貴公子を上回っている。ただし、かくや姫が難題譚でも策略的なやり方をした皇子二人を簡単に負けに追い込んだように、策略を駆使して目の前に到達しても、当然拒否している。もちろん帝は、先に述べたかくや姫の打ち立てた柵の中に分け入って、五人の貴公子が果たし得なかった対面を遂げてはいる。しかしこの段階では、五人の貴公子の話で重要視されていた「心ざし」もしくは人間的な魅力はまだ何ら示せてはいない。かくや姫が重視していたのは、難題譚でもこの場面でも権力ではないのであるから、地上の最高権力者であるということとは心を動かす要素にはならない。

かくや姫は、翁の「などか宮仕へをし給はざらむ。死に給ふべきやうやあるべき」との問いに、たくさんの人の「心ざし」を無にしたのに、やすやすと屈しては「人聞き」悪く恥ずかしいとも述べており、帝と先の貴公子たちを、ある意味で同列に扱っているかのようですらある。

帝の求婚に対し、かくや姫は拒否の姿勢を貫き、自分が変化の者である証拠でもある「影」、つまり自分の本当の姿を見せる。帝はかくや姫の前に到達し、対面することに成功し、連れ帰ろうとするが、かくや姫の本当の姿まで見てしまうのである。そしてもとの人間の姿も一度見たいと言い、その姿を見て、翁に感謝し宮廷に戻る。

六 「心ざし」と帝像

帝がかぐや姫に対面し、さらには人間でない姿まで見たところで物語はしばし間をおく。帝はやはりかぐや姫のことが忘れられず、后たちを全員遠ざけ「独り住み」をするようになり、かぐや姫との文通で心を慰める日々を過ごし、かぐや姫への純粋な「心ざし」を持つに至る。こうして帝の求婚譚の後半は再度動き始めるようになっていく。かぐや姫も「さすがに憎からず」と応えたり、「御心を互ひに慰め給ふほどに、三年ばかり」と過ごしている。かぐや姫の変化の姿を見てもなお思いを寄せる帝に、かぐや姫も心を許し始め、相手に対し重視していた「心ざし」のありようを、確かめつつ平穏に過ごしているようですらある。

ここで、前の五人の貴公子が果たし得なかった、かぐや姫との「対面」と「心ざし」を示すという二つが揃うことになる。特に帝の場合にはかぐや姫の変化の姿を見てもなお思いを募らせるという言葉が究極の愛情の形を示している。

しかし、対面後の平穏な日々のは後の話は、急展開を見せていく。言わば天上の論理が地上の論理など消し去ってしまうことになる。かぐや姫が月を見上げ思い悩む様子、それを心配する翁と姫の様子が主となっていき、姫が月に帰ることを告白するくだりとなり、昇天を待つばかりとなるのだが、ここで姫の昇天を何とか食い止めようとするのは帝である。いわば変化の者であっても求愛する思いは変わらないのだから、行かないでほしい、行かせはしないという一途な思いを示す。かぐや姫が貴公子たちを相手に重要視していた「心ざし」は示されており、求めるものは揃ったはずなのだが、変化の者であり、天上の人であるかぐや姫には定められた期日が迫っている。帝は一途な思い

から、月への帰還阻止の実力行使として、尋常ならざる兵力の動員という最大限の努力をする。

ただし注意しておきたいのは、こうした誠意も、権力による物質的な愛情の示し方になっていくことである。難題譚で財力や権力にものを言わせた貴公子の失敗が想起される。付け加えれば迎える天人に對峙し舌戦を繰り広げたのも、翁であり帝自身ではない。

確実にかぐや姫は連れ去られ失われるとは分かっているものの、土壇場で人間ができることは、かぐや姫が拒否し続け、心を全く動かすことのできなかった、権力による物質的な抵抗だけであるのは皮肉としか言いようがない。

かぐや姫は翁姫を氣遣い、さらに帝に手紙と不死の薬を残し、去っていくのであるが、後日、帝は、かぐや姫がいない今、生きながらえる意味などないと不死の薬を焼かせてしまう。富士山の山頂で不死の薬を焼く意味については、私としても稿を改めたいが、今は地上で最も天に近い場所だと思いアピールするものと解しておきたい。

いずれにせよ、帝は最愛のかぐや姫からの手紙と万国の権力者が切望する不死の薬を焼き捨ててしまうのである。

いくら心通わせようともそれはかなわぬ、いわば大きな絶望の中に決して到達できない希望が展開されていった末、帝のかぐや姫への「心ざし」、かぐや姫が重要視していたもののみが残ったのである。

七 「色好み」を超える帝像

『竹取物語』の中で「色好み」という言葉は一度、それもかぐや姫の生い立ちについて述べられた後、求婚する世間の男たちの中で、特に五人の求婚者が残ったという、この五人の貴公子を評して用いられているに過ぎない。帝についての記述には一切用いられていないのであ

る。諸注釈^{注3}が施すように、五人の貴公子のところで評される「色好み」は、好んで異性と交情にふけり、恋愛情事にまつわる情趣をよく解する者といった理解で何ら差し支えはないのであり、五人の貴公子はそのような人物として評されてしかるべきであろう。また帝の求婚の話では、帝が「色好み」という語で評されることはない。

しかし、見てきたように五人の貴公子による難題譚と帝の求婚譚は、単に失敗譚で共通するのではなく、また単に帝は六人目の求婚者失敗者という順での並びというだけでなく、密接に関係している。五人の貴公子の難題譚から帝の求婚譚への関わりを、そしてかぐや姫の昇天、その後日譚への関わりを見ていけば、『竹取物語』にある帝像は、「色好み」像を超える存在を導き出すことを目的とした書き方がなされているのである。帝の求婚の話で、帝を単に「色好み」という語で評することがないのも当然のことであろう。

物語中で「色好み」と評された五人の貴公子は、難題を前に求婚に失敗し、敗れたのである。それではと地上界で最も権力のある人物として帝を登場させてはいるが、理由はそれだけではない。

五人の貴公子の難題譚から、帝の求婚へ、話は「心ざし」を巡って引き継がれており、かぐや姫との「対面」と「心ざし」を示すという二つを揃えることに向かつており、『竹取物語』における帝像は、五人の貴公子の難題譚の話と関連している。今回見てきたように、貴公子たちの失敗の原因を、帝は方法はどうあれ乗り越え、かぐや姫と対面を果たし、「心ざし」を示すこともでき、一時ではあっても平穏な日々も過ごし得た。五人の貴公子が「色好み」と評されている以上、帝像もその「色好み」の延長にあるようではあるが、同列と言うよりは貴公子たちの「色好み」像を超えるものとなっている。

「色好み」論には、古くは折口信夫の「色好み論」^{注4}がある。王威を維持拡張するのにふさわしい女性を選び、后としていくべき帝が、

かぐや姫のことが忘れられず、后たちを全員遠ざけ「独り住み」でかぐや姫の文通で心を慰める日々を過ごすというのでは、この物語における帝は、このような「色好み」のくくりからははざれていることになる。しかしそのはずれ方は脱落という意味ではなく、「色好み」を超えるものと言えよう。

この『竹取物語』で示された帝像は、折口の「色好み」というくりには、権力拡大、好き者、まめな者といった、どの要素からも逸脱するものである。そしてそれは大きく上回る、人としての理想像とでも言うべき姿なのである。むしろ、単なる「色好み」を超える存在を示すには、帝という存在しかなかったと見ることもできよう。その帝像は、帝だからこうなるというのではなく、地上界の一人間が、恋愛という点において示しうる最上の、理想化された姿を突き詰めていく際、その人間像を当てはめうる存在として書かれ、登場している。最上の権力者としてというよりは、最上に描きうる人間像としてである。

「色好み」たる貴公子たちが失敗した点を乗り越え、人間ではないかぐや姫を、権力の頂点であることを脇に置いてまで愛しつづけている。そして、愛すべき存在を失った後は、万国の権力者があこがれた不死をも求めない姿は、相手を思う究極の愛を貫く姿である。

かぐや姫はやはり、相手に対しては、権力や物ではなく「心ざし」を重要視した。かぐや姫が心を動かされているのは、翁や嬪に対してそうであったように、自己のすべてをかけて相手のことを思いやるという姿勢を示してくれる存在にである。かぐや姫が地上の人間において最も重きを置いたのは、こうした人間の心の有りようだったのではない。考えてみれば、これは人間にとってもっとも尊い姿でもあり得る。そうした「心ざし」の有りようを、求婚者の中では、帝のみが、かぐや姫の人間ではない姿を見た上でも愛し続けるといふ姿勢で、しっかりと示すことができたのである。

こうした帝の姿は、一人間の理想化された像であり、地上のそれは特に男としての人間が示しうる最上の形が、「色好み」という要素を利用しつつそれを超える形で示されている。

八 終わりに

読者は、あれだけの貴公子が失敗した後は、地上の最高権力者という意味で帝しかないだろうと想像し納得するであろうが、作者としてはむしろ、権力の度合いを最上にするというよりも、地上の人間として、最高の「心ざし」を見せうる存在として帝を当てはめたとも考えられる。そういう意味で帝は登場させられていると見るべきではないだろうか。

最高の存在、それも男としての最高の姿を見せうるのは「色好み」としてなのであり、その「色好み」像は、世に評判の貴公子などをしのご、心のあり方を持ち、女性を愛せることにある。

作者は、世間的によしとされていたであろう価値観を超えたところ、世間的価値観の究極を志向していたとも思えるのである。『竹取物語』は、人間にとつての「心ざし」というものについて、世間的価値観を超えたものへの志向の痕跡が見られる作品と言えるのではないだろうか。

引用した本文は、室伏信助訳注『新版竹取物語』（角川文庫、平成十三年三月）によった。

注

1 「五人の貴公子像」や「難題譚」についての見解は、拙著『竹取物語』難題譚の構造―対照によってもたらされる主題について―（全国大学国語国文学会平成一九年度冬季大会口頭発表表に基づく。後日論文で詳細を参照されたい）。

2 三谷榮一「五人の貴公子段の構成」『鑑賞日本古典文学第六巻竹取物語・宇津保物語』（角川書店、昭和五十年六月三十日）をはじめ、三谷氏の二連の著作で同様の指摘がある。三谷氏は、対照の關係を見いだした最も早いもので、石作の皇子と庫持の皇子とで対照、大伴御行の大納言と中納言石上麻呂足とで対照の關係とし、さらに、石作の皇子と庫持の皇子の組と、大伴御行の大納言と中納言石上麻呂足の組とで、二話ずつ組となつて、右大臣阿部御主人を中心として対照の形となつてしていると指摘している。しかし、右大臣阿部御主人の「中心」の意味と役割、さらにはこうした対照關係が何をもたらすかまでは言及なさっていない。

3 野口元大校注『新潮日本古典集成竹取物語』（新潮社、昭和五十四年五月五日）頭注など。

4 折口信夫「色好み論」『折口信夫全集第十四巻』（折口博士記念古代研究所編輯、中央公論社、昭和四十一年二月）。